

## 雪、天からの手紙、

北国の冬はアラレが激しく屋根を打つ音で始まる。冷たい時雨（むぐれ）模様の天気が続いた後、ミゾレ混じりの初雪が降る。にわか雪にアラレが混じり、何度か本格的な雪が降っては消えまたつもり、いつの間にか根雪の季節となってしまう。

アラレは雪雲から雪のつぶてのように降り落ちてあっという間に真っ白に積る。雲の中で雪片や過冷却の雲粒が無数にくっつけて、雪だるまのように太っておちてくる。その後から雪がひらひらと舞い流れるように落ちてくる。

降る雪を手袋でそっと受けてみると、幸運なときには小さな結晶を散りばめた六本の腕を伸ばした美しい雪の華の結晶を見ることが出来る。顕微鏡で見れば円い視野のなかに、六角形の氷の板や水晶のような六角柱、針のような細い結晶、鼓（つづみ）の形なの、千変万化一姿を変えた雪の華のモザイクが浮かんでくる。

六葉の時には二本の腕を出し、まれには一八本の腕を持っている雪の結晶を見つけることができる。雪雲の中のドラマがいろいろな結晶の形となって落ちてくるのである。

雪の魅力は、巧妙な造作と、その言葉の響

きが良いことである。三十年も昔だが南極昭和基地に越冬したおりに「ユキ」という言葉に大変に厄介になった。

今でこそ赤道上空の通信衛星経由で、日本と南極が国際電話やメールで結ばれているが、当時は銚子無線局とのトンツーによる電報が唯一の通信の手段だった。越冬中の二年余の間はもちろん手紙の配達はない。カタ仮名の電報が日本の家族と南極を結ぶ唯一の糸であった。字数で電報料金が決まるので、せいぜい二、三十字で最大限でも五十時。短いカナ文のなかにいかに多くの言葉を伝えるかに腐心した。

その中で、日本を出発する前にアメとか行きとか短い言葉の組み合わせで通じる十幾つかのカタカナ暗号表を作った。その中で「ユキ」は最も多く使われた言葉の一つであった。

雪は天から送られた手紙である。そしてその手紙の文句は結晶の形、模様という暗号でかかれています」と雪博士、中谷宇吉郎先生の有名な言葉であるが、微妙に変化する雪を状態を雪という暗号の便りで地上の私たちに伝えてくれ、「ユキ」は白い大陸南極と日本を結んだ便りの暗号言葉のひとつだった。